一九〇三（明治36）年11月21日、歴史に残る第1回早慶戦は、東京・三田の慶應グラウンドで開かれた。一高という強敵をおいての試合とはいえ、ともに私学の雄の対決。東京を二分する観衆三千が、かたずをのむ中で世紀の一戦となった。

当時両ナインとも、ユニフォームだけは一応揃っていたが、それ以外はほとんどなかった。スパイクはなくて足袋はだし、ストッキングもなくスネを出しての戦いぶり。投手は慶應が桜井、早稲田は河野安通志（こうのあつし）。

第１回早慶戦のメンバー（後列右から３番目が桜井）
（慶應義塾福澤研究センター所蔵）

試合は両者の打線が爆発して7回まで8対7という接戦で、早稲田がリードしていた。8回表、慶應の3番打者の宮原がいきなり右中間を破って2者をかえして逆転、さらにヒットを重ねてこの回4点をあげ、11対9で慶應に凱歌があがった。

●学生野球は早慶時代に

この試合をみた一高は早速、早慶両校に試合を申し入れた。まず第一戦は早稲田が対戦したが、前年までの一高の勢いはさっぱりみられない。結果は9対6で早稲田が勝利した。

ショックを受けた一高は、陣営を建て直し、慶應との第2戦に臨んだ。試合は9回表では一高が1点リードしていたが、その裏、桜井の大三塁打で2点をあげ、11対10で慶應が勝った。この一戦で学生野球は完全に一高時代から早慶時代にかわり、野球人としての桜井の地位も決定的となった。

桜井は慶應卒業後、一時は銀行に勤めたが、野球への思いは捨てがたく、慶應OBでつくった三田クラブで活躍、その後監督となってアメリカなどへ遠征、さらに、同クラブ会長として後輩の指導に当たった。

戦後は一時、郷里の旧桜井村に疎開していたが、晩年は娘のとつぎ先の伊豆大島で暮らし、70歳すぎまで野球のコーチをしていた。

一九六〇（昭和35）年、桜井は日本野球の発展功労者として、野球殿堂入りした。野球殿堂は野球体育博物館（東京都文京区後楽）にあって、野球発展に大きな貢献をした人を讃えるため、現在（二〇一二年）まで百七十七人が殿堂入りしている。

殿堂には「慶應義塾大学の投手兼強打者として初期早慶試合にチームの中心となり三田クラブを率いて野球界の元老として敬愛された」とする顕彰文と彼のレリーフが掲額されている。長野県出身では桜井がはじめての殿堂入りであった。

（中村勝実）

野球殿堂に掲額されている桜井のレリーフ
（財団法人野球体育博物館所蔵）

参考文献
中村勝実『近代佐久を開いた人たち』櫟

佐久の先人たち⑩

早慶戦第一戦の勝利投手

桜井弥一郎（さくらいやいちろう）

（1883～1958年）

日本の野球は、王・長嶋の登場でプロ野球の黄金時代を迎えたが、それまでは学生野球が人気の的で、その開幕を飾る早慶戦第１戦は慶應に凱歌、桜井弥一郎は歴史に残る勝利投手に輝いた。

●石合戦で鍛えた投手力

桜井は佐久市桜井の出身。町村合併以前は桜井村といわれたこの村は、面積二平方㌔と佐久地方では最も小さい村で、その割には人口が多かった。耕地が狭いので昔から境界争いが盛んで、千曲川をはさんだ対岸とは、よく水争いを起こした。それに刺激されて、子どもたちも時には石合戦へと発展した。

桜井も少年時代、何回かその石合戦に加わった。その思い出が忘れられないためか、彼は慶應の学生時代『運動の友』という当時のスポーツ雑誌に次のように投稿している。

「…年もからだも小さいながら、ずいぶん敵を悩ますものがあった。それは僕だった。僕は石なげが得意だった。そのため、僕は小さい時に頂戴したお目玉の多くは石投げだった」。

桜井は野沢小学校から旧制上田中学（現上田高校）に進んだ。当時はまだ佐久には旧制中学はなかったので、やむなく上田に下宿しての進学。彼は早速、野球部へ入った。

わが国に野球が伝えられたのは、それより20年余り前の一八七二（明治5）年。当時はアメリカ直輸入そのままに「ベースボール」と呼ばれていた。それが後に「野球」と訳され、上田で始められるようになったのは、彼が上田中学へ入学した頃だった。当時の野球部は宮原清（のちに初代日本社会人野球協会長）、鷲沢与四二（のちに衆院議員）などが中心で、県内では最強を誇っていた。

彼ははじめは捕手だった。マスクもミットもなく、素手でワンバウンド・キャッチ。その後、遊撃手となるが、その守備範囲は広く、華麗なる彼のプレーは、野球熱が高まるとともにファンの喝采を浴びた。

●夢の早慶第一戦

上田中学を卒業した桜井は、はじめ一高（旧制第一高校）をめざした。当時の一高は〝天下の秀才〟ばかりでなく、野球も全盛時代で、早稲田も慶應も一高には歯がたたなかった。一足先に慶應に入っていた宮原は、彼に慶應入りをすすめ、「強い一高に入るのもよいが、その一高を倒すのも男子の本懐ではないか…」

その一言に桜井も一高をあきらめ、慶應への道を選んだ。

慶應のユニフォーム姿の桜井

こうして慶應に入った桜井は「打倒一高」をめざして猛練習。1年後には投手として初挑戦した。結果は13対10。敗れたとはいえ、無敵一高に肉薄する善戦ぶりだった。

この結果に早稲田がわいた。一高にかわって「早慶時代も夢でない」と、その前哨戦として早慶戦の開催を呼びかけた。勿論、慶應も大賛成。「打倒一高」に燃える早慶戦はこうして開かれることになった。